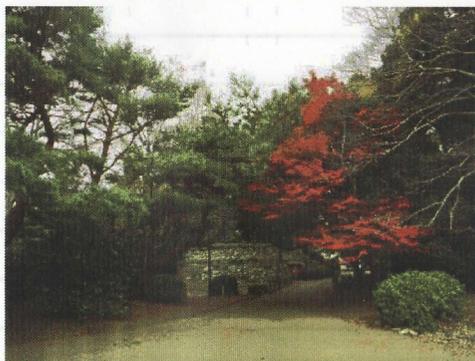


豊橋公園の生物について有縁の方々の調査を通して、その一端に触れた。本記録が将来の豊橋公園の在り方を考える一資料になれば嬉しい。次にその一愚見を披れきすがミミズのたわごとと御放念を乞う。第一案として公園中心地を史跡名勝天然記念物に指定し、樹木公園の名称のもとに永く子孫に継承して行きたいと、ひたすら念願する一人である。いな市民全体の切な願いでもあろう。樹木については、るる詳述したがクロマツを王に常緑のタブ、クス、カゴ、落葉のケヤキ、エノキ、ムクの樹相はすばらしい。樹齢は二百年から二百五十年と推定されるものが殆どで、その配植の妙と姿態の巧みさは自然ならでは、はぐくみ得ない業である。小区域ではあるが県下の他都市にこれに勝る森を知らない。そそり立つ巨岩壘上にもたれ、豊川の清流、はるかにかすむ本宮、石巻の霊峰、頑強な近代的吉田大橋を眺めると、ひしひしと豊橋市民の優越感がわきおこるに違いない。学術的に観ても樹木は最もよい自然物で特に樹肌の観察には絶好。市民の憩いの地としては更に大きく昔も今も、昼となく夜となく市民の足音は絶えない。語らいの場であり、散歩の場であり、休息の地である。祇園花火、豊橋祭見物に果たした役割は大きい。ただし博覧会や共進会はお断り。また野鳥の森としたいのも野鳥の会の人たちのみではあるまい。更に重要なことは現存の濠を如何なる理由があっても埋めてはならぬことで、すみやぐらの西濠は最も心せねばと考える。史蹟については多くを知らないが保存の価値については耳にすること久しい。



豊橋公園:樹木公園

(12月6日撮影)

2011年 定例自然観察会

都市公園の自然 ～豊橋公園の30年

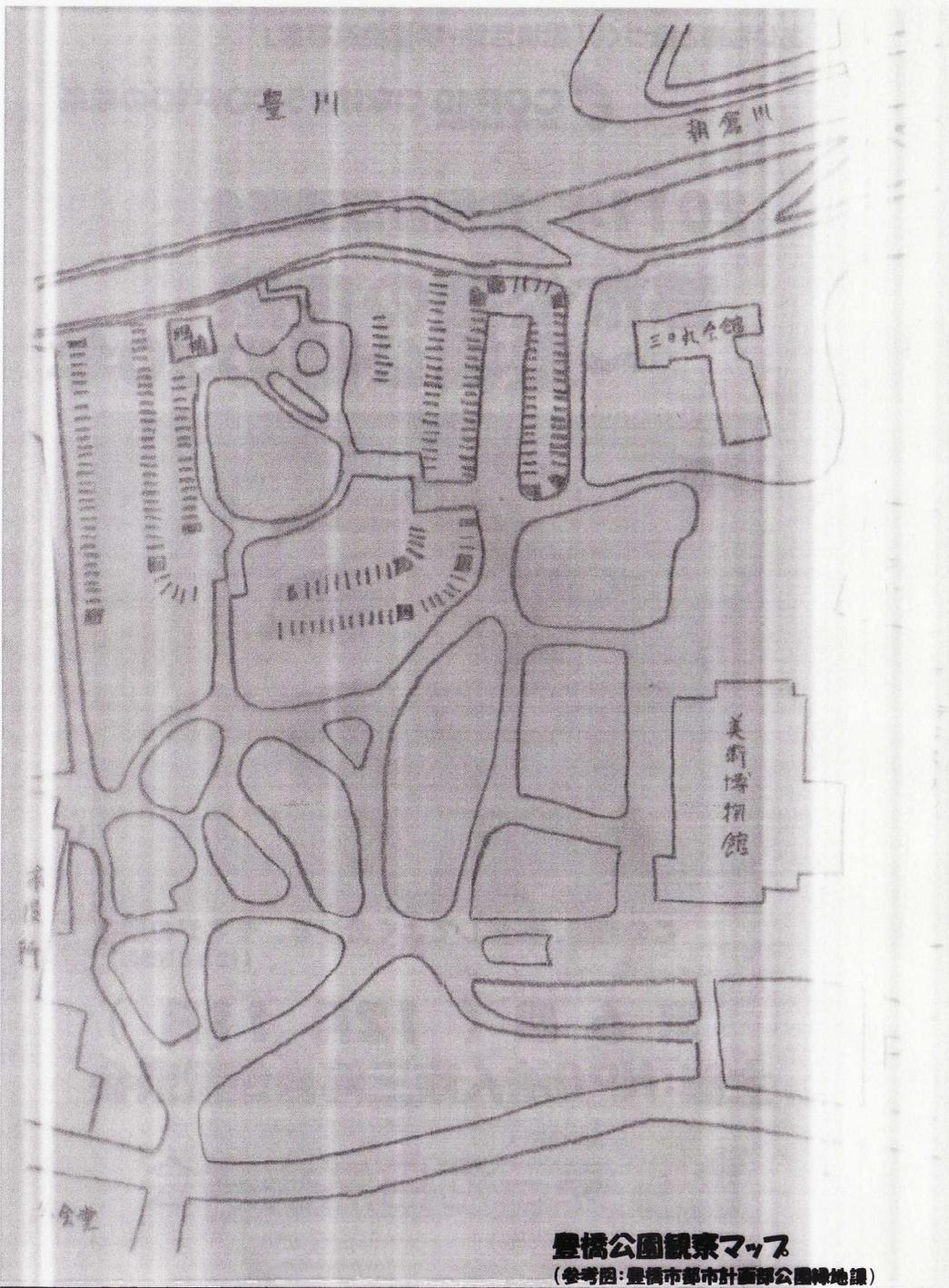
この時期、紅葉してよく分かる、モミジの所在
(12月5日撮影)

第6回 (12月11日)
主催:NPO法人東三河自然観察会



NPO法人

東三河自然観察会



観察記録 (メモ)

Observation record area with horizontal lines for writing. The lines are evenly spaced and cover most of the right page.

豊橋公園観察マップ
(参考図: 豊橋市都市計画部公園緑地課)

2011. 12. 11. NPO法人 東三河自然観察会

2011年 定例観察会「都市公園の自然～豊橋公園の30年」第六回 参考資料

1. 紅葉「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著：昭和58年発行) (p. 81)

十月下旬から始まり、十二月中旬に終わる。一番早いのはケヤキ、終わりはコナラ類とモミジである。街路樹ではイチョウ、ハンテンボク、プラタナスが美しい。同じ種類でも環境要因によって遅速がある。一番よい例はモミジ(イロハモミジ)である。十二月十五日ごろ公園内を、あちこちしているとモミジの木が紅葉しているのによくわかる。園内で一番の好点は豊城神社前から本丸に抜ける付近であるが、とりわけ美しさを誇るのは風生句碑のモミジである。快晴の日に逆光の位置から仰ぎ見ると華麗である梢がちぢれかかる十二月二十日前後が最後の美を現す季節で真っ赤になる。まだ樹間のものは黄緑、樺色、紅と変化が見られるとともに、遅くまで紅葉が楽しめる。体育館近くの小栗風葉碑付近も古木があり、観葉地点である。思うにモミジの紅葉期は、十二月中旬であろうか。



黄色、樺色、紅・・・(12月5日撮影)



ナンキンハゼ(12月5日撮影)

黄葉を代表するのはナラ類で木丸の西土塁上のコナラは、二十日ごろでも見ごたえがする。市役所の西入り口付近のテリハコナラも遅くまで生きた黄葉が見られる。渥美、豊橋地方での黄葉美はコナラ林で、広い範囲に黄の世界を展開する。代表は葦毛湿原である。十一月下旬から十二月中旬ごろにかけて、湿原から普門寺まで(三～四キロ)歩くと黄と紅の観葉ができる。純に近い黄ではイチョウである。早いもの遅いものさまざま。とにかく、十二月は少なくとも一度は歩きたい。

2. 公園の野鳥(下)「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著：昭和58年発行) (p. 104)

(この項は「富安氏」の筆による。)

豊橋のような気候の温暖な平野部では、夏よりもむしろ冬の方が野鳥の種類が多い。繁殖地としてよりも、越冬地として利用されることが多いのである。

豊橋付近でも、冬はハクセキレイ、モズ、ジョウビタキ、シロハラ、ツグミ、ウグイス、メジロ、カシラダカ、アオジや水辺のカワセミ、キセキレイなどでにぎやかになる。

秋一番にまずモズが姿を見せ「キーンキーン、キチキチ」とカン高く叫ぶ。モズのいわゆる“高鳴き”で、これはナワ張り宣言をしているのであって、ナワ張りが確定してしまえば静かになる。



モズ♂(絵解きで野鳥が識別できる本：叶内拓哉 写真・文：文一総合出版より)



頭頂から後頭は青みの
ある灰白色で、額
から眉斑、後頭にか
けては白っぽい。顔
縁から上面は黒く、
腹と脚は褐色。

ショウビタキ♂(絵解きで野鳥が識別できる本:
叶内拓哉写真・文:文一総合出版より)

豊川の両岸や公園内に多く見られるエノキにヤドリギの寄生したのがかなりあるが、この実を求めてヒレンジャクの群れがやってくる。スズメより大きなブドウ色の鳥で、尾の先が赤いのがヒレンジャク、これらがやってくると、冬鳥たちの季節も終わりを告げるのである。

冬の公園で、モズがみはらしのよい枝先にとまって、ゆっくり尾を振っている姿は印象的である。公園内のツバキの花が咲くと、メジロが蜜を求めてやってくる。本丸跡から豊川べりの茂みの中では、姿はなかなか見せないが、ウグイスとアオジの地鳴きがよく聞かれる。



全体には雄とほとんど
変わらない。嘴の下
が雌では赤っぽい。雄
にもわずかに赤みのあ
る個体がいる。

カワセミ♀(絵解きで野鳥が識別できる本:叶内
拓哉写真・文:文一総合出版より)

3. 冬景色「豊橋公園の自然」(恒川敏雄著:昭和58年発行)(p. 63)

五十六・二・二七記、この日は、まれにみる寒い日であった。お堀の斜面に多いヤブツバキが午後の陽光を浴びてピカピカ輝いている。落下した花、葉かげにひそむ花、これからの蕾が、それぞれ同じ数であった。常緑広葉樹を代表して公園を飾っている。椿公園と称しては、

落葉樹ではケヤキの樹形が美しい。細い梢が天空にそびえている風格は公園の王者にふさわしい。常緑と落葉の相半ばする豊城の森は、今が最も判明し、真の樹相を把握することができる。

隅櫓の豊川展望台に立って近く遠くをしげしげながめる。河原と清流、森の緑から構成される金色島の行く末を思うと胸が熱っぽくなり、川ぞいからの吹き上げる凍風もさして寒くない。森の中ほどにポッカーあいたすき間がうらめしい。切られたのは主にシロダモ。四メートルもあるサイカチは見えない。エノキについてのヤドリギの球が数えられる。隅櫓の守り木イスも、その姿が明らかになった。

濠内の草たち、とくに常緑のシダが斜面にあらわに見えている。アオキも今が一番分布がわかるキチジョウソウ、ヤブランもその量と位置がはっきりしている。豊城神社前にたたずむイヌマキ、スギの老樹がさびた緑をみせその間の大空に、白い雲の流れが見られた。

クロガネモチの赤い実なく、南堤にはもう早春のタンポポ、スマレ、オイイヌが花を見せる。春近し。



冬の隅櫓西の濠内(12月6日撮影)